透析中止 揺れる現場

「考えたこともない」「終末期なら選択肢」

東京都福生市の公立福生病院で腎臓病の女性（当時44）が昨年8月、人工透析を取りやめて死亡した問題で、透析を現在受けている患者は「中止なんて考えられない」と病院側の対応に疑問を投げかける声が大勢だ。一方、現場の医師は「終末期の場合、選択肢を提示することは当然ある」と認める。専門家は「患者の意思は揺らぐ。最後まで方針を変更できる対応が不可欠」と指摘している。

ペイシェントフッドの宿野部武志代表は週3回、職場近くのクリニックで透析を受ける

専門家 患者意思 常に尊重を

「透析の中止は考えたこともない」と話すのは透析を20年間続けている東京都杉並区に住む男性（66）。慢性腎不全で血液をろ過する機能が低下した腎臓の機能を補うため、1回5時間の透析を週3回受けている。

始めた当初は足がけいれんするなどの症状が出るなど苦しんだという。横になると症状が出るため、壁により掛かり立ったまま眠る生活が続いた。男性の妻（64）は「当時は隣で見ていてつらかった。毎日を無事に過ごすことで精いっぱいだった」と話す。

ただ男性も妻も「透析を続ければ、これからも生きていけるのは分かっていたから、やめる選択肢は思いも寄らなかった」と口をそろえる。その後、薬で症状は改善し、退職後の今は夫婦そろって散歩に出かけるのが楽しみだ。

2017年12月末時点の透析患者は約33万4千人で、12年末（約31万人）に比べ、8%増加している。高齢の患者も多く、65歳未満の患者は33%ほど。14年の透析医学会の「維持血液透析の開始と継続に関する意思決定プロセスについての提言」では「患者が意思決定した治療とケアの方針を尊重する」とされる。

負担少ない道も

透析患者の就労や生活を支援する一般社団法人「ペイシェントフッド」代表、宿野部武志さん（50）によると、個人差や病状による差はあるが、透析後に血圧低下などで体調が悪くなることもある。体重や水分量の管理など生活上の不便もある。

だが自身も高校卒業直後から週3回透析を続けており、「尿毒症などの症状が改善され、透析を